

令和4年度札幌市総合教育会議

- 1 日時 令和4年11月28日（月）10時30分～11時35分
- 2 場所 市立札幌旭丘高校 講堂（中央区旭ヶ丘6丁目5-18）
- 3 出席者 札幌市長 秋元 克広
副市長 町田 隆敏
教育長 檜田 英樹
教育委員 阿部 夕子（教育長職務代理者）
佐藤 淳
石井 知子
道尻 豊
中野 倫仁
- 4 事務局 教育委員会
教育次長 竹村 真一
生涯学習部長 木村 良彦
学校教育部長 長谷川 正人
総務課長 前田 憲一
庶務係長 上野 千沙
教育政策担当係長 手塚 優希
学びのプロジェクト担当係長 石郷岡 徹
- 5 学校 市立札幌旭丘高等学校
校長 相沢 克明
副校長 杉本 式史
教頭 信田 篤
事務長 中辻 拓実
- 6 傍聴者 6名
- 7 議題 未来の札幌を牽引するグローバル人材育成に向けた取組について

○木村生涯学習部長 札幌市教育委員会生涯学習部長の木村でございます。ただいまから、「令和4年度札幌市総合教育会議」を開会いたします。それでは、以降の進行につきましては、秋元市長にお願いしたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

○秋元市長 皆さん、おはようございます。お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。

今日の議題は、「未来の札幌を牽引するグローバル人材育成に向けた取組について」ということでございます。

今年度、札幌市は市制施行100周年という節目を迎えました。これまでの100年間は人口の増加に伴い、街が大きく発展してまいりました。現在は、まさに次なる100年のスタート地点にいるわけでありますが、一方で、今後、札幌市においては、少子高齢化や人口減少、とりわけ年齢構成の構造が変わってくる状況にあります。

加えてグローバル化や気候変動、感染症への備えなどの新たな課題にも対応していかなければならないわけでありまして。こうした環境の変化を踏まえまして、札幌市では今後10年のまちづくりの計画を策定しております。先般、基本的な方向性ということで、「第2次札幌市まちづくり戦略ビジョン」の議決をいただきました。この新たなビジョンでは、『ひと』『ゆき』『みどり』の織りなす輝きが、豊かな暮らしと新たな価値を創る、持続可能な世界都市・さっぽろを<目指すべき都市像>として掲げております。

<目指すべき都市像>には、札幌市の特徴・魅力である「ゆき」との共生や「みどり」との調和、あらゆる世代の多様な「ひと」との交わりによって、新しい時代にふさわしい真に豊かな暮らしをつくるという想いを込めたところです。

また、学術、スポーツ、文化などの様々な分野において、新たな価値を生み出すことで、国内外から活力を呼び込み、人口減少などの成熟社会における課題を一早く解決する拠点として、世界をリードし、持続可能で、多様性と包摂性のある世界都市を目指してまいります。

こうした都市像の実現に向けては、国際競争力の向上に向けた取組が重要であると認識しております。

教育の大綱におきましても、「世界の舞台で活躍する『さっぽろっ子』を育てる」ことを教育の方針として掲げているところでありまして、外国語教育の充実等により国際人

材を育成する、そして国内外の交流を深めていく、このことで新たな価値を生み出せる「さっぽろのまち」にしていく必要があると考えております。

そこで、本日は、未来の札幌を牽引するグローバル人材の育成に向けて、本市の進むべき方向性について協議させていただきたいと考えております。

それでは、議論に入る前に、本日の事前視察の説明も含めて、教育委員会における取組状況等について、事務局から説明をお願いします。

○長谷川学校教育部長 学校教育部長の長谷川でございます。

私から、未来の札幌を牽引するグローバル人材の育成に向けた取組状況等についてご説明させていただき、この後の議論の足掛かりとしていただければと存じます。

説明の前に傍聴席の皆様、並びに報道各社の皆様に一点お願いがございます。

この後の説明の中で、前方スクリーンにお示しするスライドには児童・生徒の写真と動画が出てくる場合がございますので、その際の撮影につきましては、個人が特定できないようにご配慮をお願いいたします。それでは皆様、正面のスクリーンをご覧ください。

はじめに「札幌市教育振興基本計画」における札幌市の教育が目指す人間像について確認させていただきます。

「札幌市教育振興基本計画」は、教育基本法において、各自治体が教育の振興に関する施策を定めるよう示されていることを踏まえ、平成 26 年度に 10 年間の計画として定めたものでございます。本件計画におきましては、札幌市の教育が目指す人間像として「自立した札幌人」を掲げております。

この「自立した札幌人」には御覧の 3 つの構成要素がございますが、上から 3 つ目の「ふるさと札幌を心にもち、国際的な視野で学び続ける人」につきましては、「ふるさと札幌への思いを心にもち、伝統や文化を尊重しながら、国際的な視野ももって、札幌をはじめ様々な地域や国で活躍する人になってほしい」という思いを込めて、構成要素の一つとしたものでございます。

この「自立した札幌人」の実現に向けましては、現在進行中の教育振興基本計画・後期教育アクションプランにおいて、「国際性を育む学習活動の推進」を重点項目として取り組んでおります。

具体的に推進するための各種取組につきましては、表にありますように、日本の伝統と文化に触れたり、外国の人々と交流したりするなど、体験的な活動を推進することを始めとし、英語教育を推進する中で異文化を理解し、協調する態度やコミュニケーション能力を育むなど、国際社会で信頼と尊敬を得るにふさわしい資質・能力を育むことを狙いとして進めているところでございます。

札幌市におきましては、教育振興基本計画に基づき、各年度ごとに、特に重点となる施策や教育内容を、「札幌市学校教育の重点」として、すべての園、学校及び保護者等に示しております。

今年度の「札幌市学校教育の重点」の概要は、ご覧のような内容構成となっておりますが、今年度からは、多様性を認め合い、あらゆる偏見や差別をなくし、支え励ましあう温かい人間関係の構築を目指し、「人間尊重の教育」を学校教育の重点の基盤として位置付けたところでございます。

また、本構成の右端にあります教科等の枠組みを超えた取組としまして、「国際理解教育」を重点項目として掲げており、「外国語教育の充実（札幌市英語教育改善プランの推進）」と「異文化理解の深化、平和に関する教育の充実」の2つの取組を進めております。

「外国語教育の充実」につきましては、「札幌市英語教育改善プラン」に基づき、子どもが主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図る資質・能力などを育成するために、ご覧の6つの視点に基づき、英語教育の充実を図っているところであります。

具体的には、「札幌市 CAN-DO スタンド」呼んでおります、技能毎に目指す英語力を定めた学習到達目標を活用し、各学校で子ども一人一人の目標を設定する取組を進めることや、今年度から全面実施しております、小中一貫した教育の小中学校のパートナー校間で、子ども同士がオンラインでの英語の授業交流を行う取組なども進めております。

また、異文化理解の深化、平和に関する教育の充実につきましては、グローバル化が加速度的に進展する中、今後も英語は国際共通語の中心的言語であり続けるであろうことから、英語教育の改善・充実に向けた取組に加え、外国の方々との交流や体現的な機会を充実させるなど、我が国の伝統と文化の理解、それを大切にする心情や世界の多様な文化を受け入れ、尊重しようとする資質・能力を、「人間尊重の教育」と関連付けて充実させていきたいと考えております。この「人間尊重の教育」につきましては、その充

実に向けて、子ども一人一人が「自分が大切にされている」と実感できる学校づくりの推進することとしており、ご覧の3つの「人間尊重の教育」推進事業を実施しております。

また、子どもの人間尊重の意識を育むための取組として、現在、全ての小中学生が1人1台端末を活用して意見を出し合いながら、一人一人を大切にすることをテーマとした全市共通の「さっぽろっ子宣言」を策定する取組を進めております。この「さっぽろっ子宣言」の策定にあたりましては、全ての小中学生を対象としたアンケートを行い、各区の代表中学校の生徒会を中心に、アンケートの結果を反映した宣言案を作成し、再び全ての小中学生の意見を取り入れた上で、最終的に宣言が決まっていくことになっております。一人一人を大切にすることをテーマとして、全市全ての小中学生の意見をもとに、子どもたち自身が宣言文を決めていくという、自治的な活動を取り入れた、札幌市として初めての試みとなります。

「人間尊重の教育」によって育もうとしている精神は、生命の尊重、人格の完成、基本的人権、人間愛などの根底を貫く、国境や文化なども超えた普遍的なものであり、来るべき共生社会において欠かすことのできない資質であることから、英語教育に限らず様々な教育活動において、引き続き「人間尊重の教育」を推進していく必要があると考えております。

それでは、これらの取組を踏まえまして、本日ご覧いただいた授業についてご説明させていただきます。

本日ご覧いただきましたのは、啓明中学校の丸山 未来（まるやま みく）教諭による3年生の英語の授業でございました。

この授業では、前半部分で、生徒たちが啓明中学校の良いと思うところをお互いに出し合っておりまして、本日ご覧いただきましたのは、生徒たちが出し合った良いところを、今後さらに良くするためにはどうしたらよいかを話し合っているところでございました。その後、端末上で各生徒がアイデアを出し合い、投票を行うなどして、生徒全員で共有するという授業の流れになっております。

この授業は、「子どもがよりより学校づくりを図るために、自分の思いや考えを英語で伝え合う言語活動（コミュニケーション活動）」を扱うものでありますが、これは、先ほどご説明いたしました「さっぽろっ子宣言」策定の取組と重なる面もあると考え、英語

教育と「人間尊重の教育」の両面を取り入れた実践の好事例として、本日ご覧いただいたものでございます。

お手元に現在の英語教科書もお配りしておりますが、私が英語を習ったときの時代とはずいぶん趣が違いまして、「読む」「書く」ことに加え、「話す」「聞く」の要素がずいぶん増えているなという印象を受けております。教科書の102ページになりますが、3年生の最後には、英語による簡単なディベートを行うようなことも設定されております。

英語の学習指導要領では、「日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする」ことを目標としており、本日の授業者である丸山教諭は、このような言語活動を繰り返し経験させることを通して、自分の思いや考えを伝えたり、相手に即興で応答や質問したりする力の育成を目指していると伺っております。

教育委員会といたしましては、このような授業を全市隅々まで展開していくことが、国際的な視野で学び続け、札幌をはじめ様々な地域や国で活躍する人の育成に繋がるものと期待しているところであります。

続きまして、実際の授業をご覧いただくことはできませんでしたが、本日のテーマに関連しまして、開成中等教育学校における国際バカロレアの活用状況についてご説明させていただきます。

国際バカロレア、略してIBであります。IBは国際バカロレア機構が提供する探究型の特色的なカリキュラムで、双方向・協働型授業により、グローバル化に対応した素養・能力を育成する国際的な教育プログラムであります。IBの使命、教育理念である「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」は、「自立した札幌人」や「人間尊重の教育」にも相通じるものがあると考えます。

IBは年齢段階に応じた複数のプログラムが用意されておりますが、特に日本の高校2・3年生に相当するディプロマ・プログラム、略してDPであります。DPでは、原則として英語で授業・試験を実施する必要があります。

また、数学、地理歴史、生物化学といった日本でもなじみのある教科に加えまして、DPに特徴的な必修科目として「課題論文」、「知識の理論」、「創造性・活動・奉仕」の3

科目が設定されており、これらのプログラムを通じて質の高い課題探究的な学習の提供が可能となっております。

DPを履修し、所定の成績を収めると、国際的に認められる大学入学資格、いわゆる国際バカロレア資格が取得可能となりまして、世界の大学入学者選抜で広く活用されております。

開成中等教育学校におきましては、学校の教育理念とIBの教育理念との親和性が高いことから、開校当初からIBの導入を決定し、平成29年3月にミドルイヤーズプログラム、略してMYPであります。これが認定され、平成30年9月にDP認定を受けました。

現在、開成では1～4年生の全生徒を対象にMYPを、5・6年生の希望者にDPを実施しているところでございます。

DPにつきましては、プログラム履修に高度な専門性が求められることなどの理由から、毎年10名程度の受講者数となっております。DPを選択しない5・6年生に対しましても、1～4年までのMYPのエッセンスを引き継いだ開成独自の教育課程である「インクワイアリ・プログラム (Inquiry Program)」を実施しております。

DPの授業などは英語により実施するため、開成には「英語」「数学」「物理」「音楽」「美術」の5科目に英語のネイティブ教員を10名配置しております。

先日、DPの数学の授業の様子を録画してまいりましたので、ここで少しご覧いただければと思います。

～動画：30秒程度～

開成における英語によるDPの授業の様子をご覧いただきました。

ネイティブ教員の配置は、DPの授業だけではなく、英語のレポート指導や、海外見学旅行の運営・引率、担任としてホームルームを担当するなど、授業内外において英語による日常的なコミュニケーションを行う環境にもつながっており、開成におけるこのようなネイティブ教員の活躍は、文部科学省の発行する事例集でも紹介されているところでもあります。

また、これまで開成では、DPの卒業生を2期、21名輩出しておりまして、うち5名が海外の大学に進学している状況でございます。進学先には、名門といわれるオーストラリアのメルボルン大学も含まれており、卒業生の今後の海外での活躍が期待されます。

このほか、現在の4年生にDPに進むかどうか希望を取ったところ、過去最多の16名が希望する結果となりまして、DPの先輩の成長する姿を見たことによる好循環が生まれているものと捉えております。

今後も、開成におけるバカロレアの活用により、国際的な活躍に向けて世界に羽ばたく人材の育成を進めてまいります。

私からの説明は以上でございます。次に、旭丘高校数理データサイエンス科に係る部分につきましては、旭丘高校の相沢校長からご説明いただきます。

○相沢校長 旭丘高校校長の相沢でございます。

私からは、数理データサイエンス科についてご説明させていただきます。

まず、開設の経緯でございますが、旭丘高校では、学校改革の一環として、平成29年度に策定されました、札幌市立高校教育改革方針に基づきまして、科学技術系人材やグローバル人材の育成に向けた理数教育を主とする専門学科の新設につきまして、数年かけて検討するとともに、教育委員会との協議を重ね、スライドにあるような教育理念をまとめ上げていたところございました。データサイエンスとは、データを収集・分析して、そこから新たな価値を見出す学問であり、政府のAI戦略2019におきましては、デジタル社会の基礎知識、いわゆる「読み・書き・そろばん」的な素養の1つと位置付けられております。学校としては、このデータサイエンスに係る専門的人材の育成が札幌市においても喫緊の課題とされていることもあり、まさに、市民の大きな期待のもと、本学科が開設されたものと考えているところでございます。また、カリキュラム開発にあたりましては、新しい分野ということもあり、非常に苦勞していたところではございますが、北海道大学数理・データサイエンス教育研究センターとの連携により、現在は着実に取組を進めているところでございます。

次に、北海道大学との連携についてでございますが、大きく3点ございます。1点目はデータサイエンス教育アドバイザーの委嘱です。歴代のアドバイザーはスライドにあるとおりでございますが、市立高校教員を対象としたセミナーの開催ですとか、新学科のカリキュラム編成・実施に関する指導・助言など、本当に多大な貢献をいただいております。

2点目はスキルセットの作成です。学習者のレベルごとに習得が必要なデータサイエンスに係る知識・技術を体系化したものをスキルセットと呼んでおりますが、実は高校レベルのものはございませんでした。そこで、大学レベルのものを参考に、アドバイザーの指導・助言のもと、本校独自に70項目を策定したというところでございます。

3点目は博士人材の派遣でございまして、これは全国唯一の取組でありまして、先日、道新でも大きく紹介をされたところです。当初は戸惑いを感じておりました新村 貴之（にいむら たかゆき）先生でございまして、今では教職の面白さに手ごたえを感じ、最先端のデータサイエンスに関する知識や、その有用性をいかに生徒へ伝えるかについて熱心に研究を進めるなど、数理データサイエンス科の専門性を担保する上で、今後ますますその活躍が期待されているところでございます。

続いて、数理データサイエンス科の学びについてでございまして、本学科はデータサイエンスを学習のエンジンとした理数系の専門学科ということで、数学と理科につきましては、横断的な内容、探究的・発展的な内容を取り入れるなど、より専門性の高い授業を実施しております。また、情報につきましては、サンライズデータサイエンスという、略してSDSですが、学校独自の専門科目を開設し、オープンデータを題材に情報収集、分析、考察、発表、これらを通してデータサイエンスの基礎を学ぶ授業を実施しております。

その他、土日や長期休業中に、希望者を対象に開校するサイエンスアカデミーという学校を飛び出した学びも展開しております。こちらは、大学や企業との連携により、実際にデータサイエンスやIT、AIなどの最先端分野を活用している現場へ訪問し、体験的に学ぶということを目的としております。参加した生徒にとっては、普段学校で学んでいる知識や技術のその先を垣間見る、本当に貴重な機会となっております、日々の学習意欲の向上にもつながっております。今後は、札幌市立大学やニトリとの連携による講座も予定されているところでございます。

最後に、本日ご覧いただきました情報の専門科目、SDS基礎の授業についてです。入学後、生徒たちはオープンデータである円山動物園の入場者数を題材にして、まずはデータサイエンスの基礎を学んだ後、札幌探究の単元に進んだところです。本単元ではまず、気象、環境など15のモデルテーマから、関心に応じて班を編成し、夏休みの課題の中で発表資料の作成に取り組みました。夏休み明けには、アドバイザーである行木 孝

夫（なみき たかお）教授にご出席をいただきまして、各班が研究計画について発表するとともに、今後の研究の進め方についてアドバイスをいただいたところです。そのアドバイスを踏まえ、生徒たちは研究を進めており、本日は12月14日に実施予定のポスターセッションに向け、データ整理ですとか、ポスター作り、まさに発表準備の最終段階をご覧いただいたところです。この後はポスターセッション、そして外部大会への発信等に取り組む予定でございます。

以上、ご説明させていただきましたが、学校としましては、本学科で学んだ生徒たちがデータサイエンスを駆使しながら、未来の札幌を力強くけん引していくことを夢見ながら、今後も数理データサイエンス科の充実を図ってまいりたいというふうに考えております。

私からの説明は以上でございます。ありがとうございました。

○秋元市長 ありがとうございました。教育委員会での取組み、それから、先ほど見ていただきましたけれども、旭丘高校での数理データサイエンスの授業の取組を説明いただきました。学校の方を視察させていただいて、これからの国際的な視野を持った人材育成という形の中で、英語教育でありますとか、いろんなコミュニケーション方法など、非常に進められているなど感じました。また、これからさらに必要となるデータをいろいろ使いながら工作をしていく力というものを見せていただきました。それでは、教育委員の皆様のご意見をいただきたいと思っております。フリーディスカッションという形で進めたいと思っておりますので、ご発言のある方は挙手をお願いいたします。では、阿部委員お願いいたします。

○阿部委員 今日の啓明中学校、旭丘高校、それから先日、開成中等を視察させていただきました。3つの学校を見学させていただいた上で一番驚きましたのは、まだそんなに月日が経っていないかと思うんですけども、タブレット端末の活用ということで、子どもたちは迷うことなくタブレットを自分のツールの一つという形で授業に取り組んで利用しているというシーンを拝見いたしまして、非常にレベルの高さというのを感じております。また、今日の旭丘高校で使っていたアプリについては、私ども札幌の企業でもビジネスシーンでよく使うようなアプリを、いとも簡単にサクサクと操作をして、

デジタルをいかに活用して一つのデータを作り上げていくかという様子を見て、これからの札幌の子どもたちが社会に出たときに、非常に楽しみで、即戦力になり得る人材になるのではないかなと感じました。啓明中学校で使っていたアプリについても、事前にジャムボードというのを使っていて、自分の意見を書き込んだ上でディスカッションに入るという意味では、今までの授業ではなかなか成しえないことをやっていたので、こちらについても驚きと感心をしておりました。

今日、用意されている英語のテキストについては、先ほど長谷川部長からご説明がありました102ページのディベートのところなんですけれども、この英語教科書の採択の時にディベートのところは凄く気になっていて、札幌の子どもたちが英語を使ってディベートというのができるのかどうか、非常に関心を寄せていた部分でもあり、心配をしていた部分でもあったんですけれども、先日の開成中等と今日の啓明中学校を見学させていただいた上で、感想といたしましては、非常にできそうな雰囲気というのを感じましたので、今後に期待を寄せたいなと思いました。

今日のテーマでもありますグローバル人材については、一つの感想ということになりますけれども、子どもたちが英語を学んでいる中で、札幌の企業では、英語を使うようなシーンがまだまだ少ないのかなというのが凄く気になっています。私自身も英語を使うという機会があまりありませんし、他の企業でもそういったシーンがまだまだ多いという現状ではないので、世界にはばたいていただくという意味ではいいと思うんですけれども、いずれは札幌に戻ってきてもらったりですとか、札幌で就職してほしいなというのが個人的な思いとしてはありますので、できれば企業誘致だったり、英語を学んだことを社会につなげていくような、そういった流れができると、より子どもたちの成長に繋がるのではないかという感想を持ちました。私からは以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。ビジネスで実際に使われている色々なアプリケーションを使っていて即戦力になるという期待、一方でまだまだ英語を使っての仕事という企業は多くないので、子どもたちが活躍する場を地元としてすくいきれるかどうか、併せて考えていく必要があるということですね。他のご意見はいかがでしょうか。では、佐藤委員お願いいたします。

○佐藤委員 札幌を牽引するグローバル人材育成に向けた取組において、何が重要かということを考えてみたんですけれども、私からは2点申し上げたいと思います。

海外との交流に対して、どうしても臆することがありますが、それに対して、心の垣根を低くする働きかけというのが必要ではないかというふうに考えております。お手元に「P A S S A G E S」という資料を配布していますが、これは2017年の北海学園大学経営学部の学部報で、グローバル人材育成に関する特集号のものとなります。心の垣根を低くする働きかけとして、どういったものを私共が取り組んでいたか紹介させていただきます。5ページをご覧いただきたいんですけれども、グローバル人材育成セミナーと名付けまして、年に4回、海外で活躍している方に講談、あるいはウェブ会議ツールを使って学生に紹介しています。その4回の中で、1回は必ず海外で活躍しているOBを当てているのですが、そのOBは起業している、もしくは学生でワーキングホリデーをしている方など、身近な人の活躍、つまり同じ学び舎で学んでいた人がもう海外で自由自在にやっているんだ、特別な事じゃないんだ、自分にもできるんだというふうに思ってもらえる取組をしています。例えば、中学校、高校でもウェブ会議ツールを使って、大学に進学して留学中の先輩であるとか、あるいは卒業後に活躍している先輩ともつながれるのではないかと思います。

続いて、7・8ページ目をご覧ください。海外展示商談会と記載がありますが、どういった事業かと言いますと、札幌市経済観光局と札幌商工会議所のご協力をいただきまして、海外の商談会に出店する札幌・道内の企業の通訳として学生を充てるというものになっています。7ページの上に「English for Specific Purposes」(特定の目的のための英語)とありますが、商談会で通訳をさせるなんて可能なのか、相当英語が達者でなければ無理なんじゃないかというご意見もいただいておりますが、範囲を絞って商談会に必要な特定の英語を学ばせるため、それほど英語が得意ではない学生も対応できるというものになっています。8ページに年度ごとの人数が出ていますけれども、これまでシンガポール、バンコク、香港とサンフランシスコで実施しまして、一度に6・7名の学生を連れて行ったのですが、TOEIC600前半くらいの学生でも、見事に通訳をこなして、投資家との契約まで進めたような事例があるところです。

こういった取組みで感じたのは、上手な英語じゃなくていいということです。上手な英語、もしくは英単語をたくさん知っていることが必要なのではなく、伝われば十分で

あり、目的達成のために必要なフレーズ、あるいは単語を習熟していれば良いんだということを担当の先生は繰り返し仰っていました。また、その先生は日本人が発声する発音で授業をされているんですけども、これで伝わればいいんだということを学生に伝えておられました。そういった考えが、心の垣根を低くするためにすごく大事なのではないかというふうに思いました。

もう1点は、グローバル人材を育成するためには、身の回りの良さを知るという働きかけが重要だろうなというふうに思います。先日、京都の英語教育の先進校を視察させていただいたんですけども、校長先生が仰っていたのは、京都の生徒は京都の良いところに気づきにくいということでした。なぜかというと、京都に生まれ、身の回りのものが当たり前だと思って育っているのです、どこが良いのかわからないんだと仰ってました。札幌も同じじゃないですかと言われ、確かに言われてみれば、札幌の子どもたちは札幌が大好きだけれども、札幌の具体的にどこが良いか、道外の方々に説明できるかという、すぐにはままならない状況です。ですから、まずは地元の良さを知り、何が良いのか具体的に説明できるということだと思えるんですね。今日、視察させていただいた啓明中学校の丸山先生の授業では、啓明中学校のどこが好きかという質問でしたが、それがすごく大事だと思うんですね。まず、自分の身の回りで良さを見つけ発信していく、そういうことがひいてはグローバル人材の育成の基盤になっていくのではと感じた次第です。私からは以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。グローバル人材の育成の根本には、やはり色々な人たちとのコミュニケーションをとっていくことだと、その中で、先ほど佐藤委員が仰っていた英語や言葉を話すのに臆する部分があるとのことでしたが、コミュニケーションツールとして上手に使えなくても、ある程度目的や意思が伝えられるような気持ちを持つということと、身の回りの良さを見つけ、相手の良さも理解していくという、特別なことではないが、それらを伝えていくということが重要という視点ですね。他のご意見はいかがでしょうか。では、中野委員お願いいたします。

○中野委員 佐藤委員と内容は少し被るのですが、国際化というと、英語を英米人並みに流暢につかわなければならないという話になりますけれども、私は大学の教員をやっ

ていまして、英語がネイティブではない国からの留学生も、外国語として英語を話しているのですが、授業を休んだ留学生に連絡を取らなければならない、たまたま日本人しかいない状況でも、必要な場合は上手じゃない英語でも聞いてくれるんですよ。知りたい人同士は互いに真剣になりますので、何とか汗をかきつつも伝わったという経験が学生の自信につながりました。お互いに流暢でなくても、内容があれば聞いてくれるということ、また、少しずつ積み上げが結構大事なところだと思いました。

それと、医師として新型コロナのワクチン接種を行っていたのですが、問診の時に外国の方がいらっしゃって、色々と質問をされたのですが、問診の場面で長々と英語を話してられないのと、お互いに英語が流暢ではなかったため、短時間に要点だけを英語で真剣に話すことで納得いただけたということがありました。実際に英語を使うという場面が多ければ多いほど学生の意欲が上がると思いますので、国際的な英語を使う環境があまり多くないというものがあるかもしれませんが、啓明中学校のように英語を使って内容を伝えるという経験をされるのは非常にいいものだと思います。教科書採択の際には、内容が少し難しいかなと思ったところもあったんですけども、札幌にとっても、今後のためにこれくらいのことはやっていただきたいという思いからも採択をしまして、実践されている姿を見て、心強いと思いました。

数理データサイエンスについて、データの分野というのは日進月歩ですので、我々も仕事としてやっていますけれども、このコロナ騒ぎで学会に行けていないと、全然わからなくなるというくらいです。現在、北海道大学と連携して、逐次最先端の内容を取り入れているとは思いますが、その情報もすぐに古くなってしまいますので、常に新しいことを絶えず取り入れていく姿勢が大事なことだと思います。特に理工は知識自体を頑張っ
て丸暗記して満点を取ったとしても、3年後にはまた勉強し直さなければならないので、高校一年生の時から絶えず新しいものを取り入れてブラッシュアップしていくという教育をされていることが、時代に適応しているかなと思いました。今日の授業を視察すると、まさしく昨日まで自分がやっていたような仕事の内容もありましたので、アルバイトをお願いできるのではないかと思うくらい、非常に心強く思いました。私からは以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。外国の方が片言の日本語を話していても伝わるのと同じように、先ほど佐藤委員も仰っていた英語に対する心の垣根を低くすること、伝えるということが重要ということですね。数理データサイエンスについても、日々変化していく内容をブラッシュアップして、変化に対応できるよういただきたいですね。他のご意見はいかがでしょうか。では、石井委員お願いいたします。

○石井委員 先ほど佐藤委員がお話されていた身の回りの良さについて、私もすごく共感する部分があったので、その点に関して意見を述べさせていただきます。今回の会議にあたって、グローバル人材の育成はどんなものなのか考えてきたんですけども、海外留学や海外で子育てをされている方に話を伺いますと、語学力はもちろんのこと、自分の国の文化だったり芸術というものを知らないで国際社会ではやっていけないという話をされている方がいまして、実際に英語が堪能であるということ以上に、自分がどういった人間なのか、どういったものに興味・関心があるのか、どういった伝統を持っているのかということが非常に大切なんだと思いました。札幌市教育委員会でも、教科等の枠組みを超えた教育として、国際理解教育の中で、外国の子どもたちとの交流以外にも自分の国の伝統・文化を知るという活動をされているのですけれども、そういった点の充実はすごく大切だなと思いますし、より札幌らしさという教育の取組を充実させていくと、国際社会で活躍できるような人材の育成にもつながるのではないかと思います。

本日の視察、先日の開成中等の視察では、英語もそうなんですけれども、ICTをしっかり活用して、積極的・主体的に学びに向かっている姿勢を拝見して、非常に頼もしく感じておりました。その中で、子どもたちが好奇心だったり、興味・関心をもったその先にグローバルの世界があるのではないかと感じました。先ほど視察した数理データサイエンス科の子どもたちは、自分たちが関心を持ったことに関してデータを集めて取り組んでいたりですか、開成中等においても、国際バカロレアを活用した探究的な学習の推進という部分でも、子どもたちの興味・関心を伸ばしてあげるということは、これからますます大切になるのではないかと思います。開成中等の視察では、子どもたちと意見交換をさせていただいたんですけども、その中の一人に東京大学のグローバルサイエンスキャンパスという、グローバルな視点に立って、未来社会をデザインできる科学技術人材を育成するプログラムに参加している生徒がいまして、その子は文部

科学大臣賞を受賞したんですけれども、「物理・音・バイオリン」というテーマで研究をしておりました。その生徒の受賞時のコメントが非常に印象に残っているんですけれども、「4歳のころからずっとバイオリン一筋で、その楽しさを一心に突き詰めてきました。」というもので、小さいころからバイオリンを習い、その成長過程で物理と出会って研究をして、受賞に至ったとのことでした。そういった、小さいときから子どもが興味・関心を持ったものと様々な教科で学んだ知識というのを、大人がマッチングさせてあげるといふか、そういった学習というのが非常に大切で、その先にグローバル人材の育成へとつながるのではないかと感じました。保護者としながらも、子どもの興味・関心を伸ばしてあげられるような家庭教育ですとか、学校教育でも個々の多様性や個性に合わせた興味・関心を引き出してあげる、また、学術的な科目と合わせてあげる取り組みを期待したいと思います。私からは以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。子どもの個性を伸ばす、興味のあるところを伸ばして、それらを学術的なところと結びついていくことで、より関心を持って、視野を広げられるということが大事ということですね。グローバル人材の育成については、語学のみならず、自国の文化や伝統をしっかりと学んで、アイデンティティを確立することが大事ということですね。他のご意見はいかがでしょうか。では、道尻委員お願いいたします。

○道尻委員 本日の啓明中学校、先日の開成中等の英語の授業を視察させていただいた中で、実際に使えるための英語の学習が充実してきているなというふうに感じましたし、自分も子どものころに、こういった授業を受けたかったなと実感させられる内容でした。

先日、京都の高校を視察させていただきました。そこでは校内留学と銘打って、ネイティブの教諭の方と授業以外でも自由に会話できるような部屋が用意されていて、ゲームをしたり、フリートークをしたり、お金はかかるんですけれども、売店のようなものもあって、買い物ができたりするんですよ。そこで、英語を使う場面を設けるといったような教育活動をされていました。そのスペースは授業にも使われていまして、授業とそれ以外の会話の機会を垣根を無くして英語に親しめるという取組をされていて、素晴らしいと感じたところです。

それからもう1点、話は変わりますが、最近の若者の意識調査を見ますと、地域とのつながりが希薄化しているということ、人との接触機会が減少しているといったようなことで、孤独・孤立という傾向が表れてきているというふうに指摘されております。先ほど説明もありましたけれども、学校教育の重点の基盤としている「人間尊重の教育」について、社会の中で自立した市民として自覚をもって、それぞれの役割を果たして活躍できる人材を育てていくうえで、とても大切なものだと思います。こういった人間尊重、あるいは人権教育については、本を読んだり話を聞くだけでは身につかない、意識として根付かないと考えます。そういった中で、開成中等で行われている子どもたちが自分で課題を見つけ、その解決方法を考えて、さらにはボランティア活動でそれらを実行し、レポートを書いたり、発表をする取組みを視察させていただいて、とても素晴らしいなというふうに感じました。始めは校内のことから始めて、やがては地域社会の問題まで広げていくんですね。本日の旭丘高校でも、札幌探究の授業について拝見しましたけれども、これもテーマを選んで、グループディスカッションをしながら発表準備をされておりまして、教育の一つの在り方として実施されているなというふうに感じました。ぜひこういった取組みを各学校の状況に合わせてながら、子どもたちが社会の一員という自覚をもって、多様な人々への理解を示しながら行動できる人材を育成していく、こういった学びの在り方として積極的に発展させていただきたいなと思います。私からは以上です。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。自己を見つめながら社会との関り・接点を持つことについて、教育の中で取り組んでいくことが大事ということですね。では、各委員から色々ご意見をいただきましたので、檜田教育長からもご意見をいただければと思います。

○檜田教育長 まずは、いくつかの学校を視察しまして、教員的な視点で意見をさせていただくと、お客さんになっている子どもがおらず、どの子もしっかりと活動に参加をされていて、英語とか苦手な部分もあると思うんですけども、前向きに取り組んでいるという印象でした。教育委員会としては、一人一人を大事にするということを掲げていますが、取り残される子どもたちがいない中で、教育をしっかりと実践していくという

ことは、ベースとしてとても大事な部分になりますので、子どもたちの活動の様子を垣間見れたのが良かったと思います。それぞれの学校で取り組まれている教員の研修では、若い先生方を中心に、いわゆる昔の受験英語ではない、コミュニケーションツールとしての英語を用いるという改革が進められていますし、今日のデータサイエンスの授業では、子どもたちの分析をしている様子を見ても、発表やプレゼンをして終わりというのではなく、周りの人をどう説得するか、自分の主張がどういうベースを基に発表するかという一歩先までを考えてデータ処理を進めているのを見まして、大変頼もしく、良いものだと感じました。今回、札幌を牽引するという点で、市長が新たに作られた都市像の中でも、まちづくりは人づくりだと仰っていますし、子どもたちが夢や希望をしっかりと持てるよう、これからも取り組んでいきたいと決意を新たにしたところであります。私からは以上です。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。各委員の方から他にご意見などありますでしょうか。では、町田副市長からもご意見をいただければと思います。

○町田副市長 本日、色々視察をさせていただいてなかで感じたのは、教職員側の力を高めていくということが本当に必要で、教科書に書いていることをただ教えるということではなく、子どもたちが自ら学び、考えることに対していかにサポートしていけるのかといった、教職員側の能力が求められるものだと思います。それはすごく大変なことでありますが、教職員側がどう体験的に身に着けていくか、教育委員会や札幌市でしっかりとサポートしていかなければならないということを強く感じました。それと、今の子どもたちは物心がついた時からスマートフォンやパソコンが身近にあるデジタルネイティブであって、それらをいともたやすく使っているので、使用方法について教職員側がしっかりと身に着けていないと、子どもたちについていけないのではないかと思います。私からは以上です。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。それぞれの立場から色々なご意見をいただきました。時間も迫ってまいりましたので、私からも意見を述べさせていただきます。本日、授業を視察させていただいて、一人一人の生徒が主体的に参加をされていて、自分

の考え方を伝えようという姿勢が見受けられました。子どもたちが社会人になるにあたり、複雑な社会課題の中で、自らの力で解決していくための力を養っていく必要がありますが、子どもたちはそういったことも考え、きちっと答えてくれていると思いました。

それと、今回視察した、様々な取組を実施する学校だけが特別なものではなく、すべての学校で同じような体験ができるよう、環境を充実させていかなければならないと考えています。それらは、教職員の能力・研修によるものもありますが、環境を整えていきながら、すべての子どもたちに色々な教育機会を作っていかなければならないと改めて感じました。まさに、まちづくりはひとづくりということで、中学生からも良い街にしてくださいと言われましたけれども、そういったことも含めて、子どもたちが住みよい街にしていくために、大人たちが頑張らなければならぬと改めて思った次第です。

本日の議題は以上となります。ありがとうございました。

○木村生涯学習部長 以上を持ちまして、令和4年度札幌市総合教育会議を終了いたします。本日は長時間にわたり、誠にありがとうございました。